

**The 18<sup>th</sup> MELTA International Conference 2009, Johor Bauru, Malaysia**  
**11-13 June, 2009**

**大会参加報告**

木村みどり（東京女子医科大学）

2009年6月11日から13日にかけて開催された MELTA 国際学会に参加した。テーマは、**Aligning Teaching and Learning: Effective Methodologies in English Language Education** で、会場は多くの教育熱心な教師たちで埋め尽くされていた。今回の大会では、私が今まで参加したことのある国際学会にはない独特の印象深い催し物があったので、それから紹介したい。

まず驚いたのは、コーランが読み上げられ、国歌と州歌斉唱で始まる、という今まで経験したことのない開会式であった。さらに、**Raja Zarith** 王女様がこの MELTA の学会のパトロンであるということから、30分間美しい **Queen's English** で、マレーシアの英語教育の在り方についてレクチャーをなさったことだ。彼女は、**Oxford** 大学で教育を受けており、「自国の経済発展のためには英語の能力が不可欠であること、そして、英語で教育を受けること、英語を公用語とすること、はマレー人としてのアイデンティティを失うことではない」ということをご自分のイギリスでの生活の例も取り上げながら、以下のように力説された。

"When it comes to English, we must forget politics and nationalism and look at it as a language that could steer us ahead economically."

"Being proficient in English would not make a student any less Malaysian.

We do not have to fear English. It will not change us into pseudo-English people and it won't change our eating ha-bits or culture."

まるで、女優のように美しい王女様が立たれるたびに、会場一同が立ち上がり、その後文部大臣、MELTA 会長のスピーチの中で、"Her Royal Highness"という言葉は何度聞いたことだろうか。幸運にも、私は JACET からの派遣ということで、身近に王女様を拝見できる席に座っていたが、隣の MELTA の役員の方々が王女様と握手されていたにもかかわらず、自分も握手を求めていいものかどうか戸惑い、また、この美しいお姿を是非写真に収めたいとデジカメを握りしめながらも、失礼をしてはいけないと、硬直したまま立っていた。しかし、最後の晩餐会の時には、スカートの両端をつまんでお姫様お辞儀(?)をして、言葉を交わすチャンスが幸運にも巡ってきた。生涯忘れられない思い出となりそう。

次に印象に残ったことは、MELTA が "Melt-A-Heart programme" と称して、マレーシアの小学校の英語教育を支援しており、今回も学会の 1 週間前くらいに全参加者にメール

が届き、小学生用のテキストとして使用できる本の寄付が募られ、また、ディナーパーティでは、その熱い思いを表現する赤いものを身につけるように、という要請があった。本を持参した人には、ネームカードに **Melt-A-Heart** のマークが付けられた。マレーシアでは多くの小学校で英語による教育が行われており、大会日 3 日目には、**MELTA-Smart Kids Way with Words Competition 2009** が催され、多くの小中学生が教師に付き添われて参加した。競技が始まる前には、ホテルのロビーで、電子辞書らしきものを出してお互いに単語のチェックを真剣に行っている様子が、まるで、大学受験を控えた日本人の高校生のものであった。

第三に印象に残ったことは、前述のマレーシアの英語教育とも関連するが、マレーシアは英語を公用語としているため、マレー人同士でも皆が当然のようにお互いに英語で会話をしていることだった。これが **ESL** と **EFL** の違いなのだと、英語の上達しない日本国民のことを思い巡らせていた。そのことをさらに強く意識したのは、韓国の **KATE** 副会長の発表の中で、学生の英語を上達させるため、マレーシアの家庭に韓国人の学生をホームステイさせている、ということを知った時だった。日本では、英語語学留学と言えば、アジアでは、オーストラリアかニュージーランドしか思い浮かべないが、韓国は、近くて安い費用で留学ができる、ということで多くの学生をマレーシアに送り込んでいるらしい。副会長としてはフィリピンよりもマレーシアのほうを希望している、という話であった。

それでは、いよいよ、大会の内容に触れたい。多くの魅力的な **Plenary Speech**、**Featured presentation**、**workshop**、があり、どれに参加するか決めるのに困ってしまうことが多かった。それらの中で、印象に残った以下のものについて述べたい。

## **Broadening Standards and Benefiting from Bilingualism in English Language Education (Plenary)**

かつて植民地を支配していた国々は、植民地時代が終わった現在も、英語というイギリス英語とかアメリカ英語が正当であるとする傾向がある。その傾向は、**TOEFL**や**IELTS**などの存在によって、いわゆる「白人英語」こそが標準英語の尺度という意識に拍車をかけている。特に発音などにおいてその傾向が強く、学習者の英語を強引に矯正し、正しくない場合は嘲笑の対象にさえする。しかし、英語という言語が人との交流、高等学問や職業への公正な機会を与えるために果たす役割を考えると、そのような旧態然とした道理に合わない態度を改め、いわゆる**L2**学習者に対して、もっと寛容になり差別的な態度を止めるべきであると、**Dr. Parakrama**は主張した。

白人英語第一主義に陥っている教師が、いかに創造性がなく、ステレオタイプのものの考え方をするか、ということをとくさんの例を挙げながら批判した。そして、スリランカの田舎の学生とアフリカ系アメリカ人の作文や話し方を例に取り上げ、彼らの作文が英

語を母語とする教師によって添削されたり、発音を矯正されたりした後、どれだけ無味乾燥なものになったかを示しながら、母語を効果的に生かす（母語の影響を強く受けた英語）ことによってしか、その国や地域独特の文化が持つニュアンスや微かな感覚は伝えられないことを強調した。また、教師の言う正当な英語のレベルではないということで、なかなか学位が取れず苦しむ学生の状況にも憤慨されていた。日本でもWorld Englishesの研究が行われているので、彼の主張は大変興味深かった。

### **The magic of Story Time (Featured)**

いくつかの絵本を取り上げ、それをただ読み聞かせるのではなく、そのストーリーの印象的な部分を、実際に子供たちと一緒に声に出して体で表現していく、という手法を紹介した。擬音やストーリーの中に出てくる動物の特徴、人の動作、英語独特のイントネーション、リズムなど、なかなかの表現巧みな発表者(アメリカ人)で、参加者一同が惹きこまれ、全員が子供になったような気持ちで声を出しながら体を動かした。この手法によって、**thinking skill** や**social skill**が養われるというのもうなずける。彼女はマレーシアでは有名な**Storyteller**で、部屋は参加者で一杯になった。筆者の専門が**Digital Storytelling**であるので、興味を持ってこのワークショップに参加したが、このようにお話を体全体で楽しむ、という学習方法を、是非、小学校英語に導入したらよいのではないかと強く思った。楽しみながら、英語のリズム、発音のみならず、単語の意味を体で覚え、英語の世界の楽しみが体験できる、なかなか効果的な手法である。

### **Do Various Test Methods Have an Effect on the Reading Comprehension Ability of the Iranian EFL Learners (Paper presentation)**

学習効果を測るものとしてテストは重要な役割を果たすが、**Reading comprehension**を考えた場合、学習者がどれぐらい内容を理解しているか、その脳の中の働きを見ることはできず、果たしてテストが実際に学習した内容を適切に評価しているかどうか、どのような評価の仕方が望ましいか、についての発表であった。学習者を3つのグループに分け、**GA (Multiple-choice testing and as an usual testing method in reading classes)**, **GB (Cloze test method)** and **GC (portfolio assessment method)**でその効果を見た。学習者の内容理解度を見るために**Level C of the Nelson Reading Skills Test (RST) (Hanna, Schell & Schreiner, 1997)**を使用したプリー・テストとポスト・テストで結果を比較した。

結論として、グループCの**portfolio assessment method**が一番効果的だったということで、その他の2つの方法の短所と**portfolio**の利点が**reflection, interaction cooperative ways for**

language teaching and learning, autonomous learningということで強調された。Portfolioは、これから日本においてももっと積極的に取り入れていかなければならない学習方法である、と思った。

### **The Effectiveness of Teacher feedback: A comparison of Oral and Written Meta-Linguistic Feedback on Students' Writing**

ライティングにおける文法の誤りを正すために、どのような教師のフィードバックが効果的か、という論文発表であった。口頭によるもの、文書によるもの、教師が個々の学生に面接して口頭で指摘するもの、という3タイプのフィードバックのグループに分け、プリ・テスト、ポスト・テスト形式で自由エッセイを書かせた英文の「主語と動詞の一致」という文法項目に関して、どのグループがどれだけ正確に書けるようになったかを、比較した。結論としては、口頭でクラス全体に間違いやすい点を指導する、というフィードバックの方法が一番効果的であった。

日頃、どのようにライティングを指導するかという点で、苦労している教師としては、結果に興味があった。書くのに費やす教師の時間や手間を考えると、朗報ではある。しかし、対象はマレーシア工科大学の学生47名で学習内容が少々低い、という気がしないでもない。発表者も、さらに、高度な文法項目でも同じ手法で試してみたいとのことであった。

### **A simulated United Nations General Assembly: Creating meaningful Real World Learning Experiences**

日本を出発する前に、子供国連会議に出席していた高校生がインフルエンザを発症した、というニュースが流れていたため、このタイトルを見た時、どのような発表なのだろうと興味を持った。対象は工業大学の学生で、このプロジェクトの目標は2つある。1. 様々な外国の文化や言語に触れる。2. 異なる国が、どのように国連で主義主張し、決定をくだしていくのか、を疑似体験する。

プレゼンテーションでは、学生たちの活動の様子をビデオ映像で流したので、実際の様子がよく把握できた。学生たちはグループごとに発表する国のことを調べ、発表日は、まるで、日本の運動会のように広場に列を作って国ごとに国旗を立てて並んだ。その後、国ごとに、ダンスや歌、お祭りの様子や、日常生活の様子、その国の言語による挨拶などを、発表国の民族衣装を着て披露した。衣装、小道具、全て学生たちの手作りで、インターネットでかなり詳しく調べたり、その国のことをよく知っている人にアドバイスをもらったらしい。そのデモンストレーションの後、大きな教室に一同が集まり、各国の代表者が世

界への要求などを発表し(英語) 各国の会衆は、自国の損得を考えながら、交渉を重ねるように、代表者に依頼する、というようなものであった。これらの活動を通して、どの国にも様々な事情があり、国連では、それらを話し合って結論を出していくのだ、ということを学生は学んだという。

準備が大変であっただろうと思うが、学生たちは積極的に取り組んだということである。まさに国際理解というのにふさわしい活動だと思った。

次に、自分の発表であるが、タイトルは **Digital Storytelling for Oral Language Development** であった。**Photosotory3** というソフトを利用しながら、英語のストーリーを作り上げていく中で、英語の音声教育が楽しみながらできる、という内容である。発表の中で、どのようにデジタル・ストーリーを制作するかもデモンストレーションした。最後の質疑応答のときにはフロアから質問がほとんどなく少々がっかりしたが、終了したとたん、何人もの教師がそばにやってきて、どうしたらそのソフトを入手できるのか、私にもできるだろうか、そのマイクはどこで買えるのか、パワーポイントのファイルが欲しい、等々質問攻めであった。この 3 日間の会議で、マレーシア人の学生は恥ずかしがり屋で、とか、おとなしくて、という言葉は何回も聞いたが、教師も同じなのだなあ、と日本の学会の様子とも重ね合わせながら一人苦笑してしまった。

この会議を通して、多くの人々とふれあい、彼らから刺激を受け、今後さらに研究者として研鑽を積みたいと強く感じた。そのせいかどうか、あるいは、**JACET** という後ろ盾があったせいか、最後のランチの時のくじで、今年 12 月 14 日から 22 日までの英語教師研修会の半額チケット(於：シンガポール) 一等賞が当たった。自分の名前を書いて出しておいた中から司会者が三等、二等と順次引いて行って当たったのだが、実際に私の名前を書いたのは、友人の **Reedy** 先生(青山学院大学)で、彼に譲ろうと思ったが彼も都合が悪く、今のところ、この一等賞は宙ぶらりんのままである。また、昨年、早稲田大学における全国大会でお会いした **MELTA** の **Dr. Normala Othman** 先生にも大変お世話になったことも付け加えておく。

最後に、このような素晴らしい学びと交流の機会を与えてくださった **JACET** と、応募のときから帰国する迄、何かとご親切にアドバイスくださった相川先生に心より感謝申し上げます。